

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：37302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652026

研究課題名(和文)キリシタン遺物の包括的調査研究

研究課題名(英文)Comprehensive Investigation and Studies of Christian Relics

研究代表者

浅野 ひとみ (ASANO, HITOMI)

長崎純心大学・人文学部・准教授

研究者番号：20331035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：全国のキリシタン遺物を、美術史、油彩修復学、考古学、文化財保存科学の学際グループで多角的に調査・研究した。3年で10回行った国内調査には、代表、分担者、博士号を有する協力研究者、延べ約40人が参加し、補助金の大半は、それらの国内旅費・謝金に充てられた。成果は2012年に論文集として出版した他、最終年も報告書を出した。研究分担者は、国内他、イタリアでも調査を行い、国際学会で研究発表をした。現在調査し得る遺物調査はほぼ完遂した。

研究成果の概要(英文)：Composed of specialists in art history, restoration, archaeology, and so on, our interdisciplinary research group investigated Japanese Christian relics. Besides the senior researcher and co-researcher, more than 40 researchers with doctoral degrees collaborated in ten investigations; most of the subsidy was appropriated for their travel expenses and fees. We published a treatise in 2012 and a report in 2014 as a part of our achievements. The co-researcher conducted various investigations in Japan and Italy and read a report at the International Congress. Overall, we were able to investigate almost all the presently accessible Christian relics in Japan.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美術史

キーワード：メダル ロレート 千提寺 プラケット 下音羽 キリシタン遺物 銅版画 信仰具

1. 研究開始当初の背景

禁教期のキリシタン遺物は、長崎などでいまだに聖遺物扱いされていることからわかるように、客観的な研究対象として扱われたことはなかった。しかしながら、今日、海外の大きな展覧会でも贗作が潜伏キリシタンによる信仰対象であったとして展示されるなど、危惧される状況にある。また、茨木市に残るキリシタン遺物はほとんどが個人所有であり、代替わりによる散逸が懸念される。

茨木市のキリシタン遺物は、ことに、質の高いものが多く、現在のヨーロッパでも見出せない非常に価値あるものが残存した稀有な例である。それらを文化財としてきちんと保存し、次世代につなぐためにも、基礎的な研究が欠かせない。

我々のグループは、美術史学2名が代表と分担研究者を務め、他に文化財科学および油彩修復学の専門家が加わって、日本にあるキリシタン遺物とその関連作品の調査を3年にわたって行うこととした。

重要文化財指定を受けている作品もあるため、対象作品調査のための許可申請書類を準備しつつ、許可が出た所から調査を行う予定で柔軟に動くこととした。

なかでも最大の眼目は、日本人によって描かれたと目される、マカオのサン・ポール教会美術館所蔵の《大天使ミカエル像》の光学調査であった。また、アイルランドのウルスター博物館所蔵の十字架やメダル等の信仰具調査の実現をめざす。

その他、群馬県立博物館、茨木市千提寺・下音羽、日本二十六聖人記念館(長崎)、東京大学図書館などが候補地となった。作品の選定は、主に協力研究者の武田恵理が行った。

武田の調査では、16-17世紀にかけて制作されたキリシタン遺物に関して、絵画、彫刻作品の描画方法と素材の調査を行う。

従来、日本画修復家の間では、初期洋風画の修復に際して、修復時に使用する水に対する作品の反応が本来の膠画と異なり、給水し難く、水分を使用すると絵画の肌合いを損なうことが知られていた。しかし、その理由に関しては、調査されず、従来通りの日本画の修復方法が用いられてきた。しかし、《原田家本マリア十五玄義図》の調査(国立歴史民俗博物館、1997)で、初めて油が使用されていたことがわかった。

2. 研究の目的

美術史、文化財科学、油彩修復学を専門とする学際グループによって、キリシタン遺物を包括的に調査・研究し、これまで明らかにされなかった総合的な観点から禁教下、国内でのキリシタン美術の受容と展開に関して考察する。

本研究・調査では、茨木市のキリシタン遺物を調査の中心とみなしながら、周辺の比較可能作品の調査も同時に行うこととした。

協力研究者の平尾良光は、千提寺・下音羽

のキリスト教関連金属製作品の蛍光X線分析を行い、化学組成を調査する。大航海時代に、西欧諸国から日本へ先進各種資料とともにキリスト教関連遺物も導入された。これらキリスト教関連作例の中に金属製のものがあり、それら資料の化学組成および材料産地から、当時の製作地と日本との関連を調査することを目的とした。

平尾の調査対象はおもに金属製品である。これまでの研究成果から、16世紀以降日本に輸入あるいは日本で製作されたキリスト教関連遺物の約50%は外国産材料を原料として使用している。この中の約30%はタイ産の鉛を原料としたことが明らかになっている。西洋で製作されたメダルや十字架などは真鍮製であり、日本製製品は鉛製あるいは青銅製品が多いという定説とも一致する(真鍮製品:ヨーロッパ産鉛使用、鉛製品・青銅製品:中国、タイ産鉛使用)。それゆえ、この傾向が本測定資料にどのように反映されているかを明らかにすることに意義がある。本研究では、茨木市の個人所蔵キリスト教関連製品に関して、化学組成を調べ、今までの関連分野における研究成果などを総合的に組み合わせ、それらの資料の意義を再確認しようとした。

分担研究者の児嶋由枝は、トレント公会議後のカトリック美術という文脈から、日本の宣教美術について調査する。

3. 研究の方法

主要な調査は下記のように行った。

2011年6月 群馬県立歴史博物館にて 満福寺所蔵「泰西王侯図」二幅、「達磨図」の光学調査 参加4名

同年7月 第二次群馬調査 参加4名

同年7月 茨木市千提寺、下音羽一次調査 参加4名

同年8月 日本二十六聖人記念館(長崎市)にて「雪のサンタ・マリア」像光学調査 参加4名

同年11月 個人蔵ガラス乾板(堺市)調査、参加2名

2012年7月 東京大学図書館蔵「救世主像」光学調査、参加4名

同年7月 小倉城跡出土メダイ1点蛍光エックス線調査、参加4名

同年7月千提寺・下音羽のキリシタン遺物第二次金属製品蛍光エックス線調査 参加4名

同年8月同第3次調査 参加3名

2012年2月 平戸聞き取り調査 参加2名

2013年2月 「陣中旗」光学調査(天草) 参加4名

武田は、主に初期洋風画の彩色レリーフ、彩色彫刻について光学調査を行った。

平尾は、化学組成を測定する方法として、ポータブル蛍光X線を利用した。機器は、約5kg程度の重量なので、それを調査資料が保存されている個人の家や茨木市立キリシタン

遺物史料館へ持ち込み、そのままの状態での測定が可能であった。

代表者は、可能な限り、インターネットで図像や文献を集め、また、個人研究費で海外の図書館に赴いた時に参照した資料から、メダルなどの金属製製品の図像源泉と制作背景について考察した。また、銅版画についてもパリの残る同作品の原作との比較を行った。

堺市より武田が委託された南蛮文化館所蔵品調査では、武田が絵画の光学調査を行い、代表者は象牙製品や七宝などの品目について調査を担当した。

分担者は、トレント公会議後のイタリアにおける聖像に関する批評、そして宗教美術作品について考察した。前者については、特にジョヴァンニ・アンドレア・ジリオの著作に注目した。後者に関しては、特にシピオーネ・プルツォーネの作品、ローマのサント・ステファノ・ロトンドの殉教場面、そしてサルス・ポプリ・ロマニ等のカトリック改革期に重要視された中世の聖像を取り上げた。

次いで、そのようなイタリアの動向を反映した日本における宗教美術として、南蛮文化館蔵《悲しみの聖母》、東京国立博物館蔵板絵《聖母子像》、及び日本二十六聖人記念館蔵《雪のサンタ・マリア》に焦点を当てた。

4. 研究成果

武田により、初期洋風画の描画技法の多くにテンペラの特徴が見られ、描く対象によって油分を増減していることが分かった。これは同時代、イタリアの技法として知られる油性テンペラに共通する特徴であり、時代的にもルネッサンスとの共通性が認められることが明らかになった。

平尾の調査では、結果として、1点を除く真鍮製のメダルはヨーロッパのメダルと化学組成が類似していることから、ヨーロッパからもたらされた製品であることが推定された。それ以外の、キリスト磔刑像、聖遺物容器などは、純銅あるいは青銅製品であり、直接製作地を判断するのは難しいが、メダルの化学組成による製作地に関する定説から鑑みて、日本で製作された可能性も否定できない。ただし、より詳細な情報を得るためには、原料の産地推定の研究も並行して行う必要がある。当該課題に関しては、今後、自然科学的分析に加え、他分野での研究の進捗を待ち、改めて考察したい。

分担者によって、南蛮文化館蔵《悲しみの聖母》、東京国立博物館蔵板絵《聖母子像》、及び日本二十六聖人記念館蔵《雪のサンタ・マリア》はトレント公会議後のカトリック美術と密接に関係していることが明らかにされた。

3年間という限られた期間であったが、最初に、武田による光学調査が進み、それに追従するように、平尾による化学組成分析が行われた。最後に美術史的な考察を加えることができたので、ほぼ当初の予定どおりに調査

を終えることができた。

本邦のキリシタン遺物のうち、現在、アクセス可能なものはすべて調査することができた。その結果、茨木市のキリシタン遺物の価値が再確認されるとともに、調査せずに通説となっていた素材(マテリアル)が異なる、あるいは技法が違うことから、その作品の制作地もまた再考せねばならないということがわかった。今後、アジア、ことにインドのゴアなどの宣教基地となった土地に残る作例との比較調査が欠かせない。マドリッドで2013年に行われた南蛮漆器の展覧会では、フィリピンで制作されたキリスト磔刑像と日本製の蒔絵の十字架を組み合わせ作例が出品されていたが、そのように、桃山時代であれば、日本から輸出されたものをアジアのどこかで組み合わせヨーロッパへ輸出することは頻繁に行われたであろう。最近の研究では、禁教期に入ると、明確なキリスト教関連物は制作されなくなるものの、蓋つきの箱などの宗教に関係の無いものは作り続けられたようだ。しかし、それらは輸出された先で再び聖遺物箱として用いられるなど、決してキリスト教と無縁になるとは限らなかった。さらに、沖縄や中国南方域などで、日本の技術を模倣した漆ものが制作されたと考えられている。従って、作品の分析・調査は、技法分析や光学的手法、化学組成分析を行った上で、図像の調査を行うことで初めて制作地と年代を推定することができるだろう。

これまで我々のグループが発表して来たデータは、美術史的研究の礎になり、新たな視点を提示することであろう。一方で、さらなる調査・研究は、ヨーロッパやアジアに行かねばこれ以上は進まないのも、また、別の機会に行うこととしたい。

残念ながら、研究代表者を中心とする、アイルランドやマカオでの海外キリシタン遺物調査は行えなかった。今後、機会があれば、ぜひ調査させていただきたく思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

1. Kojima, Yoshie, Reproduction of the Virgin Image of *Salus Populi Romani* in Japan, *Between East and West: Reproductions in Art*. Proceedings of the 2013 CIHA Colloquium in Naruto, Japan, es. Osano, Shigetoshi, Tokyo, 査読有, 2014 (in print)
2. 浅野ひとみ, 布教期の金属製キリシタン信仰具, 平尾良光先生古稀記念論集, 2013, 319-334
3. Asano, Hitomi; Takeda, Eri: A Study on a Plaque of *Madonna of Loreto*, *Junshin Journal of Human Studies*, 18, 2012, 113-136
4. Asano, Hitomi; Takeda, Eri; Takabayashi,

Hiromi, *Our Lady of the Snow* in Twenty-Six Martyrs Museum, Nagasaki, *Junshin Journal of Grants-in-Aid for Scientific Research*, 1, 2012, 1-30

5. Asano, Hitomi; Goto, Koichi: A Study of Devotional Medals in Europe, *Junshin Journal of Grants-in-Aid for Scientific Research*, 1, 2012, 49-71

6. Asano, Hitomi; Ro, Ji-hyun; Hirao, Yoshimitsu; Goto, Koichi, Lead Isotope Ratios and Chemical Compositions of Christian Medals in the *Museu Nacional d'Art de Catalunya* (Barcelona, Spain), *Junshin Journal of Grants-in-Aid for Scientific Research*, 1, 2012, 31-48

7. 浅野ひとみ、武田恵理、新発見ガラス乾板(個人蔵)第一次調査報告、『純心科研論文集』1、2012、73-130

8. 児嶋由枝、聖地口レートとローマの *Salus Populi Romani* -対抗宗教改革期イタリア美術と日本-、上智史学、56、2011、59-76

9. 児嶋由枝、かくれキリシタン聖画比較研究、『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書 論考編』(長崎県文化財調査報告書第210集)、2012、450-465

〔学会発表〕(計11件)

1. 武田恵理・浅野ひとみ・高林弘実他、天草市立キリシタン館蔵 国指定重要文化財「陣中旗」の制作・描画技法、文化財保存修復学会第36回大会(明治大学)、査読有、(ポスター発表)、2014.6.8

2. Kojima, Yoshie, Hybridization and Juxtaposition, The 2014 International Conference: Intercultural Hybridity in Mediterranean Civilizations, 釜山外国語大学、査読有、2014.1.14

3. 浅野ひとみ、16-17世紀に請来されたキリスト教関連遺品に関する一考察、スペイン史学会大会、2013.10.26

4. 武田恵理、浅野ひとみ他、群馬県立歴史博物館保管(宗)満福寺所蔵『泰西王侯図』二幅の描画技法、文化財保存修復学会第35回大会(東北大学)、査読有、2013.7.21

5. 武田恵理、浅野ひとみ他、群馬県立歴史博物館保管満福寺所蔵『達磨図』の描画技法、文化財保存修復学会第35回大会(東北大学)、査読有、(ポスター発表)、2013.7.21

6. 児嶋由枝、キリスト教の布教と文化、シンポジウム司会・パネリスト、第37回地中海学会大会(同志社大学)、2013.6.16

7. 武田恵理、浅野ひとみ他、東家伝来『マリア十五玄義図』と「聖女立像」の制作技法について、文化財保存修復学会第34回大会(日本大学)、査読有、(ポスター発表)、2012.7.1

8. 武田恵理、浅野ひとみ他、大阪府茨木市伝来の木製と象牙製「磔刑像」2点の制作事例、

文化財保存修復学会第34回大会(日本大学)査読有、(ポスター発表)、2012.7.1

9. 武田恵理、浅野ひとみ他、初期洋風画の調査で得られた新知見と図像認識との相違に関する報告-長崎二十六聖人記念館蔵「雪のサンタマリア」大阪府・個人蔵「銅板油彩聖母子像」の調査から-、文化財保存修復学会第34回大会(日本大学)、査読有、口頭発表、2012.7.1

10. Kojima, Yoshie, L'arte gesuita in Giappone e Giovanni Nicolao, IV ciclo de conferencias relaciones España-Asia Oriental (セビーリャ大学)、2012.3.14

11. 児嶋由枝、キリシタン美術と対抗宗教改革期のイタリア美術、第64回美術史学会全国大会(同志社大学)、査読有、2011.5.20

〔図書〕(計2件)

1. 浅野ひとみ、児嶋由枝他、千提寺・下音羽のキリスト教遺物、長崎純心大学、2014、126

2. 浅野ひとみ、武田恵理他、ICOCU 南蛮とキリシタンの美術、堺市立博物館、2013、104

〔外部依頼講演〕(計4件)

1. 浅野ひとみ、文化庁文化遺産を活用した地域活性化事業、キリシタン時代の西海、大崎高校、2014.2.20

2. Kojima, Yoshie, Giovanni Nicolao di Nola e l'arte occidental in Giappone (XVI-XVII secolo), Seconda Università di Studi di Napoli, Dipartimento di Studio della Componenti Culturali del Territorio, (Nola)、2012.3.19

3. 浅野ひとみ、キリシタン遺物研究:《1600年銘クレメンス8世メダル》に関する一考察、キリシタン文化研究会(上智大学)、2011.12.4

4. 武田恵理、『マリア十五玄義図』(東家本、原田家本)と『雪のサンタマリア』の光学調査結果と描画技法の研究、キリシタン文化研究会(上智大学)、2011.12.4

〔その他〕(計1件)

1. 浅野ひとみ、DVD『茨木市立キリシタン遺物史料館』(茨木市)制作協力、2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅野ひとみ(長崎純心大学准教授)

研究者番号: 20331035

(2)研究分担者

児嶋由枝（上智大学准教授）

研究者番号： 70349017